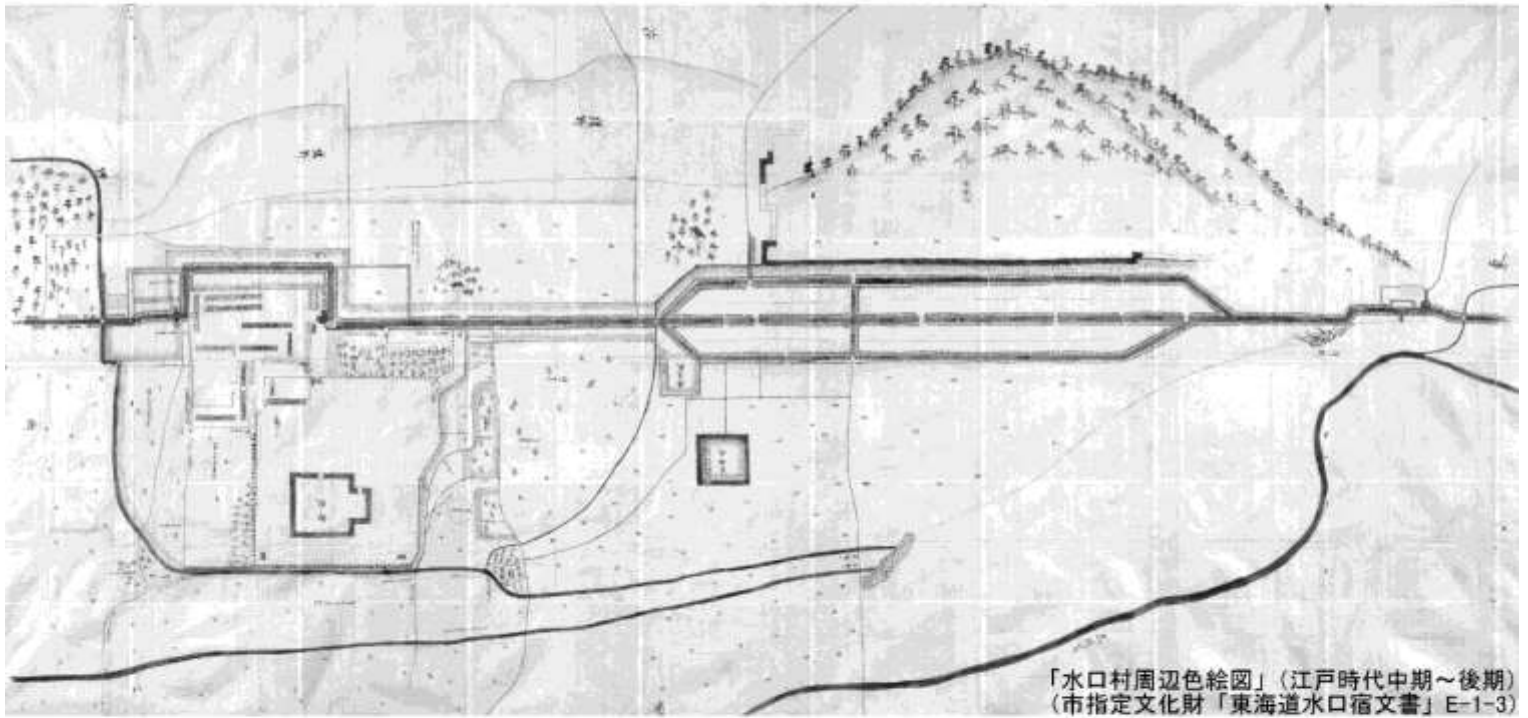




昭和 22 年の水口
(USA-M861-A-39)



「水口村周辺色絵図」(江戸時代中期～後期)
(市指定文化財「東海道水口宿文書」E-1-3)

令和元年度水口岡山城歴史フォーラム

水口・伊賀上野・亀山の 城と城下町

令和元年度水口岡山城歴史フォーラム

「水口・伊賀上野・亀山の城と城下町」

日 程

開催日 令和元年(2019年)12月8日(日)

会 場 甲賀市碧水ホール

13:00 開場・受付開始

13:30～ 主催者挨拶

13:40～14:20 基調講演 1

「総論～織豊期から近世初頭の時代～」

藤田 達生 (三重大学教授)

14:20～15:00 基調講演 2

「織豊期から近世初頭の城下町」

山村 亜希 (京都大学教授)

15:00～15:20 〈休憩〉

15:20～16:30 フォーラム

「水口・伊賀上野・亀山の城と城下町」

コーディネーター 藤田 達生 (三重大学教授)

パネラー 山村 亜希 (京都大学教授)

笠井 賢治 (伊賀市教育委員会)

亀山 隆 (亀山市教育委員会)

小谷 徳彦 (甲賀市教育委員会)

目 次

- 基調講演 1 「総論～織豊期から近世初頭の時代～」・・・・・・・・・・ 1
藤田 達生（三重大学教授）
- 基調講演 2 「織豊期から近世初頭の城下町」・・・・・・・・・・・・・・ 7
山村 亜希（京都大学教授）

総論—織豊期から近世初頭の時代—

三重大学 藤田達生

はじめに

・時代背景

天正期から寛永期…豊臣政権の天下統一から徳川政権による藩誕生へ

・各城郭・城下町の位置づけ

近江水口城…水口岡山城（天正13年～慶長5年→古城・御用林へ、天正13～18年豊臣大名中村一氏、天正18～文禄4年増田長盛、文禄4～慶長5年長束正家）、水口御殿（徳川和子の入内、秀忠の上洛に使用）、水口城（寛永11年築城→城番制→加藤家→鳥居家→加藤家）最高2万5千石の小藩。城郭と城下町（宿駅）が離れるケース。

伊勢亀山城…岡本良勝（天正18年～）本格的な築城、その後は度々譜代大名が交替する。関氏も含めると全9家、松平忠明の大坂転封で廃藩→城番制、三宅康信（1万2000石）は城番か、寛永13年（1636）、本多俊次の立藩で本格的な近世城郭・城下町へ。何度も大名が国替えを繰り返す典型的な譜代藩。最高6万石。

城郭と城下町（宿駅）が離れるケース。

伊賀上野城…筒井定次（天正13年～慶長13年）築城、藤堂高虎（慶長13年～藤堂家）改修。大手を180度変えて城下町も北谷から上野台地へ。城代のもと伊賀領10万石と城和領（5万石、大和古市陣屋）を支配。32万石大藩。城下町を移転したケース。

→水口城と亀山城の本丸御殿は、東海道に位置する將軍の休泊施設。上野城は京都・奈良への抑え。

・講演のテーマ

東国と畿内要地—京都・奈良・大坂—を結ぶ当該地域における近世化について検討する。

1. 天正13年の大規模国替…土農分離の波

国名	居城	大名	国替	関係	備考（単位万石）
伊賀	上野	筒井定次	○	服属	羽柴秀長与力、大和郡山より転封
近江	八幡	羽柴秀次	○	一門	(43)、秀吉養子
	水口	中村一氏	○	直臣	羽柴秀次年寄、信楽の多羅尾光俊をはじめ甲賀衆改易
	佐和山	堀尾吉晴	○	直臣	(4)、羽柴秀次年寄
	長浜	山内一豊	○	直臣	(2)、羽柴秀次年寄
	坂本	浅野長吉	○	一門	(0.7)、京都奉行

天正13年閏8月伊賀・近江国替一覧（数字は石高）

・土農分離…北国国分直後に秀吉が全領規模で強制→この国替によって筒井氏および中村氏の家臣団と入国先の中世武士は大きな選択を迫られた。

→筒井氏の場合

天正13年（1585）閏8月、秀吉は伊賀国を大和国主だった筒井順慶に預けた→国替は、同月18日に近江坂本城で秀吉から申し渡され、同月24日に全家臣団を率いておこなう→両国の在村武士に対する徹底的な処分→伊賀国においては、筒井氏の入国にあたり、秀吉によって伊賀衆は「牢人」になるか「百姓並」となるかの選択を迫られる→「牢人」を選んだ者たちは一斉に国外に追放→仕官運動。

伊賀では「悉以侍衆可有牢人、不然ハス百姓並被仰付了」と、大和では「住馴タル国里ヲ諸侍無残被払、於國中女子山野ニ迷為体、悲歎無極処也」（『多聞院日記』天正13年閏

8月13日条・同22日条) → 「侍払」とよばれた豊臣政権の士農分離政策は、天正13年を画期として強硬に進められた。

→ {甲賀ゆれ}

秀吉は、天正13年に紀伊雑賀攻撃を終了すると、ただちに甲賀郡中惣を解体→表向きには、紀伊太田城水攻めの際に担当した堤防が決壊したことを理由とし、「数代不易之本領ヲ召上、剩其刻者、故郷之安堵迄不罷成、佗国流浪之身与成候」(「山中文書」271号文書)と記されているように、20人ばかりの甲賀衆が牢人となって所領没収のうえ追放された→地元ではこれを「甲賀ゆれ」「甲賀崩れ」「甲賀破儀」などとよんでいる。

・ 亀山藩の町場

坂下町・関町・亀山町・板屋町(上加太宿)・下加太宿(市場) → 経済的に豊か。

・ 織豊城下町の形成 → 伊賀上野の場合

現在の城山の北側の小田 → 「茅栗草紙」に「上野城下旧ハ小田町と云」 → 最後の伊賀守護仁木長政の城下町 → 筒井氏も利用。

元々山上には伊賀惣国一揆の政庁平楽寺城があった → 筒井氏が、天守をもった近世城郭を設けた → 天守は三層で文禄年間に完成(『伊水恩故』)。

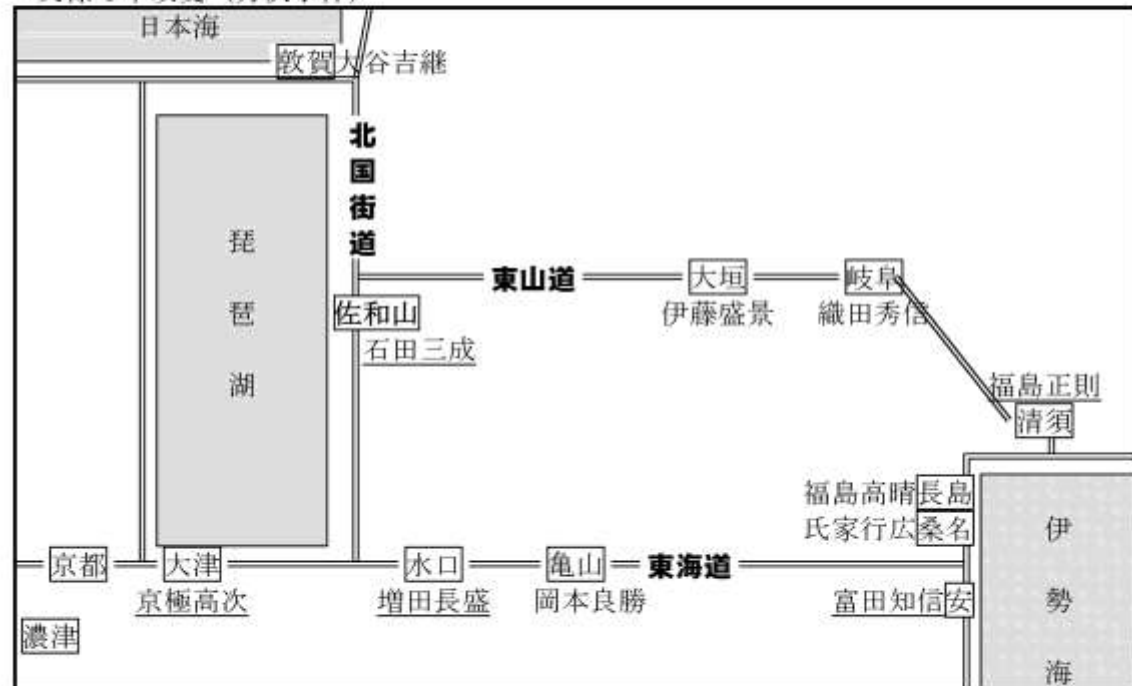
天守のそびえる本丸と、山腹に配置された複数の曲輪、北谷の大手口付近に広がる武家屋敷地区、小田町を中心として街道沿いに城郭の南側の台地上にまで展開した町屋地区 → 慶長11年2月に大火災が発生し、城下町や城郭の一部が焼亡 → 十分復興されないまま高虎が入封。

筒井氏時代の支城…名張郡の名張(名張市)、伊賀郡の阿保(伊賀市)、山田郡の平田(伊賀市)に配置 → 伊賀全四郡の各郡に一つの城郭が設定され、それ以外は城割。

支城には、松倉勝重・岸田伯耆・箸尾半三郎といった、大和時代以来の重臣がそれぞれ入城し、彼らによって近辺の市町の城下町化が進められ、各郡の中心都市としての役割を与えられた。

定次は、各城下町はもとより、御代(阿拝郡)・市部・沖・長田(以上伊賀郡)などの、主要河川沿いの市町相互に張り巡らされていた流通網を前提として、舟運によって巨大な上方市場と結びつくことを基本的な流通政策とした → 慶長16年(1611)から開始される高虎の城下町の上野台地への移転は藩経済自立をめざす。

・ 文禄4年政変(秀次事件)

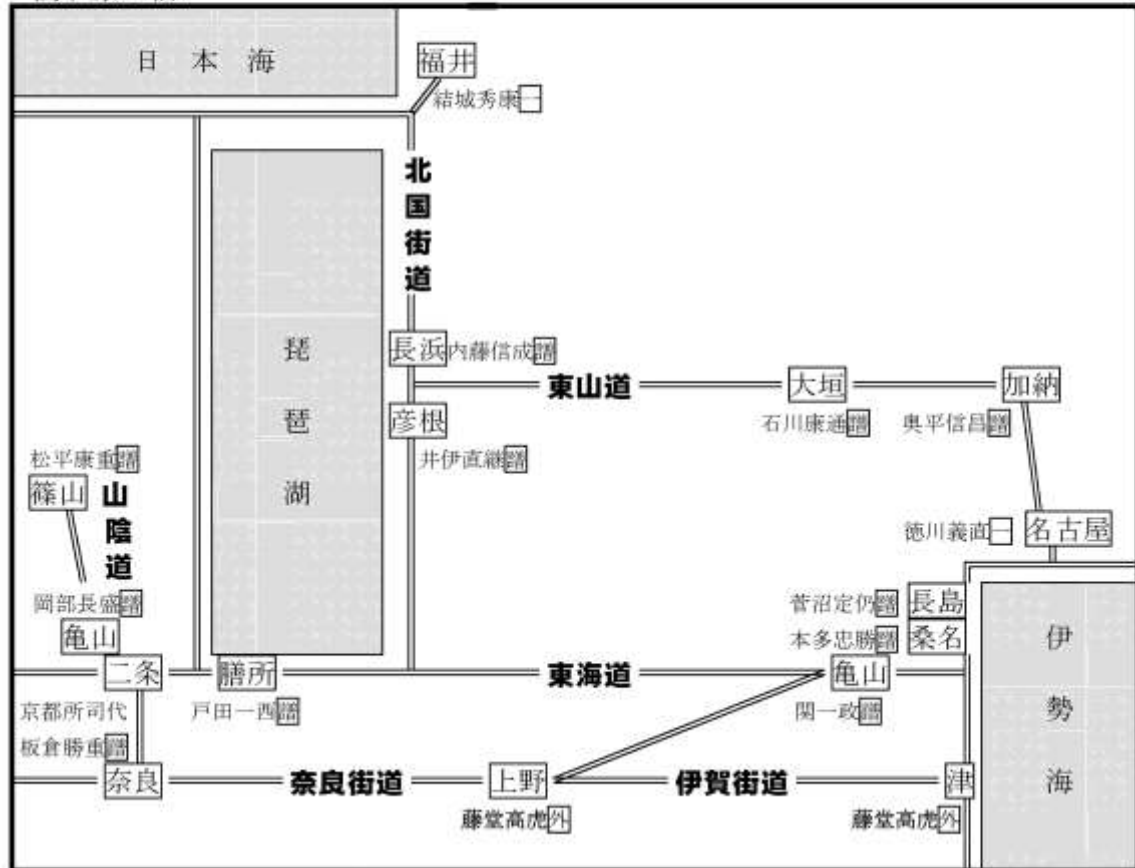


文禄4年政変後の大名配置概念図(下線は文禄4年に配置)

- ・東国から京都をめざした時に利用する主要街道である東海道と東山道を秀吉の準一門というべき福島氏（母が秀吉の叔母）や京極氏（妹竜子は秀吉側室、正室が淀殿妹初）と三成派閥が押さえた。安濃津への富田知信の配置は、当地が関東に向かう船舶の寄港地。
- ・家康と三成ら「五奉行」の「半不和」が表面化するのには秀吉の死去直後のことではあるが、軍事的な衝突を想定した防戦体制の構築は、文禄4年政変直後から進められていた。
- ・政変直後の御掟・御掟追加の発令によって、秀頼への諸大名の奉公が宣誓され、世子への政権委譲は明確→かかる大名配置は三成ら秀吉側近・旗本衆による畿内近国掌握を意味したのであり、東西の勢力バランスの不均衡を招来。

2. 大坂包囲網

- ・関ヶ原の戦い



慶長年間（5年以降）の徳川系大名配置図（□は一門、○は譜代、△は外様）

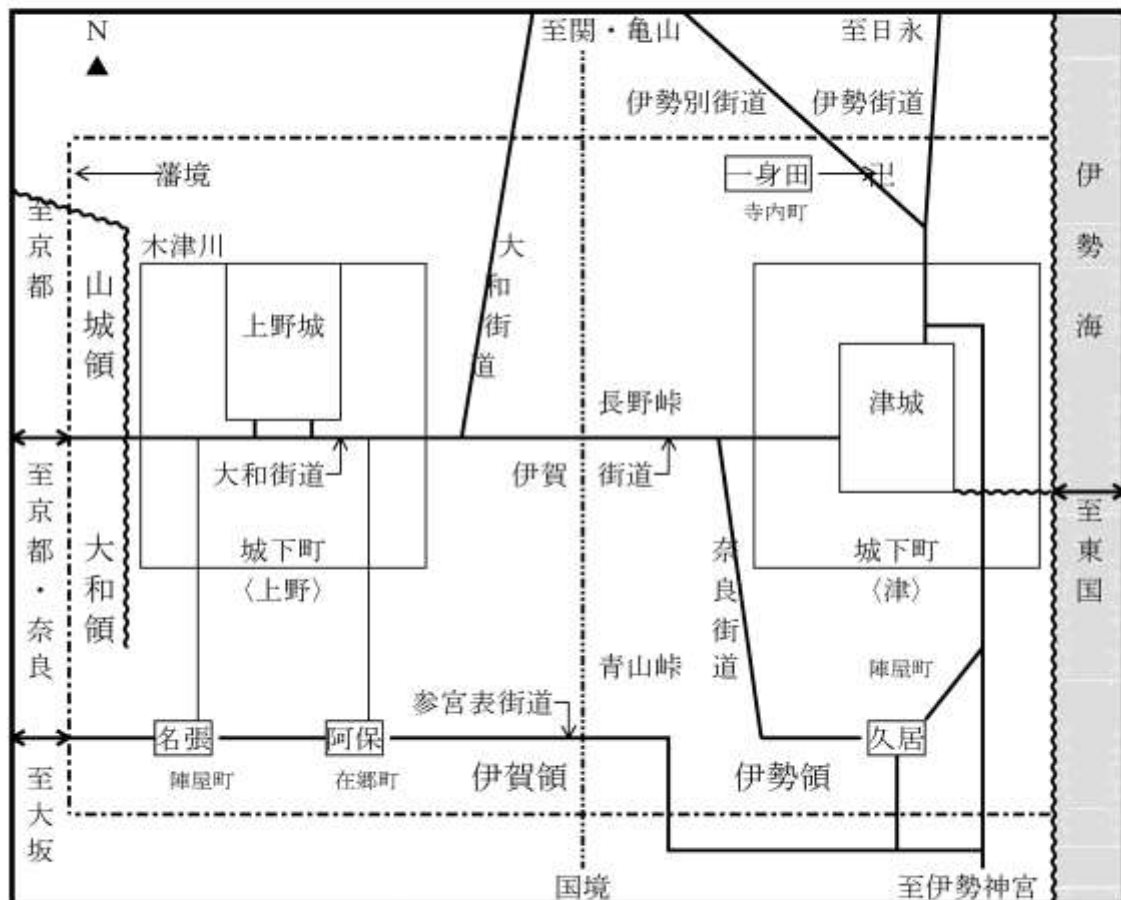
水口は徳川氏の直轄地。その他は領主交替→関ヶ原の戦い以降は、京都に至る東海道筋は譜代大名と、奈良・大坂に通じる奈良街道は家康の側近高虎が抑える＝名古屋から瀬戸内に及ぶ大坂包囲網の一環。

年	大名	格	城郭	備考
5	池田輝政	外様	播磨姫路	14年竣工、同時期に自領内の明石城・高砂城・赤穂城・備前下津井城を改修して東瀬戸内海を監視。
6	戸田一西	譜代	近江膳所	近江大津城に入城後に移転、6年から助役普請。
6	奥平信昌	譜代	美濃加納	7年から10年。助役普請。岐阜城などの建造物を移築。
6	井伊直政	譜代	近江彦根	近江佐和山城に入城後、9年から11年頃。公儀普請。大津城や佐和山城などの建造物を移築。
6	—	—	二条	6年から11年まで。公儀普請。板倉勝重と中井正清が

				関与。
11	内藤信成	譜代	近江長浜	廢城を再建、北国方面の監視。
12	—	—	伏見	6年から11年まで。公儀普請。中井正清が関与。12年から松平定勝が在番。
12	徳川義直	家門	名古屋	尾張清須城に入城後に移転、15年から17年。公儀普請。清須城などの建造物を移築。小堀遠州関与。
13	松平康重	家門	丹波篠山	丹波八上城に入城後に移転、14年から公儀普請。八上城から建造物・石材を移す。山陰方面の監視。
13	藤堂高虎	外様	伊賀上野	16年から改修。今治城などの建造物を移築。
13	藤堂高虎	外様	伊勢津	16年から改修。今治城などの建造物を移築。
13	藤堂高吉	外様	伊予今治	同国甘崎城の須知氏とともに福島正則を監視。
14	岡部長盛	譜代	丹波亀山	15年に改修。公儀普請。今治城天守を移築。山陰方面の監視。
14	脇坂安治	外様	伊予大洲	天守をはじめとする本丸建造物群を洲本城から移築した可能性あり。
15	松平忠明	家門	伊勢亀山	改修。
15	池田忠雄	外様	淡路岩屋	新規築城。明石海峡の監視。
18	池田忠雄	外様	淡路由良	岩屋城を廢し、新規築城。紀淡海峡の監視。
19	藤堂高虎	外様	伊予板島	藤堂良勝を派遣して在番。大坂の陣に備えて改修。九州諸大名の監視。

大坂包圍網の形成（年は転封年次、年号は慶長）

3. 藩の誕生



藤堂藩領内都市・街道概念図

水口・亀山…東海道上の重要宿駅かつ防衛拠点。將軍家の上洛用御殿として、幕府から城郭を預かる＝城番制→譜代大名が置かれる藩として度々藩主が交替→非領国の特質。
伊賀上野…將軍家にかわって京都や奈良を監視する拠点→藤堂氏の支配を前提に一貫して任される→領国形成へ。

高虎は、上方経済からの自立を意識して、伊賀一国の流通構造の変革に乗り出す→入国直後の慶長13年(1606)11月5日付で、上野町中^(中)に対して「國中万うりかひの儀、上野町^(中)ならびになんばりの町・同あを(現伊賀市)にてしやうばい仕まつるべく候、右のほかわきわきにてうりかい堅く停止せしむ者也」(『三国地誌』)と発令→伊賀で商売する場合は、上野・名張と筒井氏時代の城下町であった阿保に場所を限定→商農分離策で、江戸時代の流通政策・身分政策を凝縮。
・藤堂藩の伊賀領における流通政策→寛文2年(1662)に推定される4月12日付覚(東京大学史料編纂所架蔵「伊賀保田文書」)→これ以前に、藤堂藩の江戸家老から伊賀付家老に対して質問…筒井氏時代以来の流通政策を踏襲して、さらに舟運を活発化させ、上方との結びつきのなかで藩の経済的な発展を考えるのか、それとも伊勢との結びつきを強めて藩経済を強化するのかということを諮問(『永保記事略』)→伊賀付けの藤堂采女元住(城代)以下の5人の重臣達は次の三点を主張。

(前略)

〔第四条〕

一、長田 笠置^(中)迄ふね一艘ニ舟ちん大圖拾匁ニいたし、米拾五俵^(中)つミ申候へハ、馬ニ而笠置へつけ候と、米老駄^(中)ニて五分なと舟賃やすくあたり申候、左様ニ候得者、御国之米今迄之直段ニ五分程高ク成可申候哉

〔第五条〕

一、船之通路出来可申候ハ、近江・大和 伊賀上野江手寄之在々の薪も船ニ而上方へ出し可申候間、上野へ出不申候ハ、御国之薪之直段高ク成可申候、薪ヲ売候当国山中方ノ村々ハ悦可申候へ共、侍中・町人ハ迷惑可仕候哉

(略)

〔第七条〕

一、島原村ノ町ハ往還之荷物御座候故、家居もよく、大和衆など御通りの御宿をも仕候。笠置 長田への舟入申候ハ、島原へ荷物通り申間敷候間、此村之町ひし少々つふれ可申候、其上、上野廻り之村々牛馬を持笠置へ出候、荷物・米をつけ候而駄賃を取勝手に罷成候、此者共も迷惑可仕と存候

〔第八条〕

一、川筋舟入候様ニ、先年角倉大分物ヲ入川ヲほり申候、于今大河原へ舟上下御座候之時、手代を大河原ニ置候様ニ申候、余人又当国へ船入候様成候者、角倉何角と申分も可在御座候哉

〔第九条〕

一、笠置 川下、川除昔よりハ大分損申候、角倉伊賀川切ぬき候故、俄水出、其上洲も流、川除そこね候様ニ、山城他領之百姓共常々申様、西島八兵衛承候由申候

〔第十条〕

一、角倉川ヲ切ぬき申候故、水ノよどみ無御座、水はやく引、早損いたし、川成も出来候様ニ申間、夙ノ川せき先年のことくニ成可申候哉、見つもり可成儀ニ候て申越候へ者、先年西島八兵衛被上候と被仰下、八兵衛・小之助・藤左衛門見及申候へ共、さへせぎ留候事成申義ニ而無御座候故、其通り申上候也、以上

四月十二日

佐久間九郎左衛門
脇坂三郎右衛門
中小路五郎右衛門
加納藤左衛門
藤堂采女

藤堂監物様
藤堂兵左衛門様

井関彦兵衛様
内堀弥五左衛門様

第一点、米や薪などの生活に欠かすことのできない商品が、木津川の舟運を利用して大量に上方に出荷されるため、伊賀国内では不足して高値になってしまう（第四条・第五条）。

米や薪などの生活必需品については、百姓達は高く売れた方がよい→地元で売るよりも京都・大坂などの大都市で売った方が儲かるから、そちらに舟で出そうとする→伊賀では品薄になってしまって、武士や町人が困る。

第二点、笠木から長田まで舟が入ってくるようになったら、宿場町として栄えていた島ヶ原（伊賀市）が衰退するとともに、上野周辺の牛馬による駄賃稼ぎに従事していた人々にもダメージを与える（第七条）。

第三点、(筒井氏時代) 角倉氏が川を切り抜いたので、水がよどむことなく下流に大量に流れてしまうようになって、伊賀では旱魃を、山城では洪水をもたらしている（第九条・第十条）。

上方との関係を重視すると不利があるからやめようというのが回答→伊賀領と伊勢領を一つの藩領にしていく流通政策の方がよいと伊賀付家老達は判断→このような方針は高虎が上野と津を結びつけようとしたことの延長上に位置づけられる。

・人や物の移動の監視→加太越え奈良道の場合…奈良奉行・大和の諸大名・旗本・諸大寺の江戸往来に利用。本陣敷地内か近隣に藩主の御茶屋を配置…加太・板屋（以上高虎設置、出典『三国地誌』）・柘植・佐那具・島ヶ原。伊賀街道の場合…片田・長野（以上伊勢領）
・上阿波・平田（以上伊賀領、「公亭」あり）。

むすび

・天正年間には豊臣系大名の入部によって士農分離が強制され、文禄年間には豊臣直臣大名で固められ対東国の前線となる→慶長年間には豊臣系大名から徳川系大名への交替がおこなわれ、大坂包囲網に組み込まれた…東国から京都・奈良・大坂へと通じる要地に先端的政策が強制された。

・水口藩や亀山藩の場合…東海道沿いの御殿（御茶屋）が、寛永 11 年の家光上洛のために城郭として整備（城番制）→その後譜代大名が入城して城郭が整備され藩政が成立→城番支配から藩支配へ。

・江戸を中心とする家光政権の確立と主要街道筋譜代諸藩の成立は密接に関係→参勤交代の成立（寛永 12 年「武家諸法度」の改定）…「大名小名在江戸交替相定也、毎歳夏四月中可参勤」（第 2 条）。

・小藩と譜代藩および外様大藩が分立する畿内周辺の地域構造の形成→近江と伊勢の違い。

〔参考文献〕

- 『伊賀市史 第 1 巻 通史編 古代・中世』『伊賀市史 第 2 巻 通史編 近世』
『亀山市史 原始・古代・中世』『亀山市史 近世』
『甲賀市史 第 2 巻 甲賀衆の中世』『甲賀市史 第 3 巻 道・町・村の江戸時代』
『水口岡山城跡総合調査報告書』（甲賀市教育委員会、2016 年）
岩城卓二『近世畿内・近国支配の構造』（柏書房、2006 年）
藤谷 彰『近世大名家臣団と知行制の研究』（清文堂、2019 年）
丸山雍成『日本近世交通史の研究』（吉川弘文館、1989 年）
拙著『日本中・近世移行期の地域構造』（校倉書房、2000 年）『日本近世国家成立史の研究』（校倉書房、2001 年）『江戸時代の設計者：異能の武将・藤堂高虎』（講談社現代新書、2006 年）『天下統一—信長と秀吉が成し遂げた「革命」』（中公新書、2014 年）『城郭と由緒の戦争論』（校倉書房、2017 年）『藤堂高虎論 初期藩政史の研究』（塙書房、2018 年）
『藩とは何か—「江戸の泰平」はいかに誕生したか』（中公新書、2019 年）
拙稿「文禄四年政変と近江佐和山城」（『織豊期研究』17、2015 年）「伊賀者・甲賀者考」、（『忍者研究』創刊号、2018 年）

織豊期から近世初頭の城下町—近江を事例として—

京都大学人間・環境学研究科
山村亜希

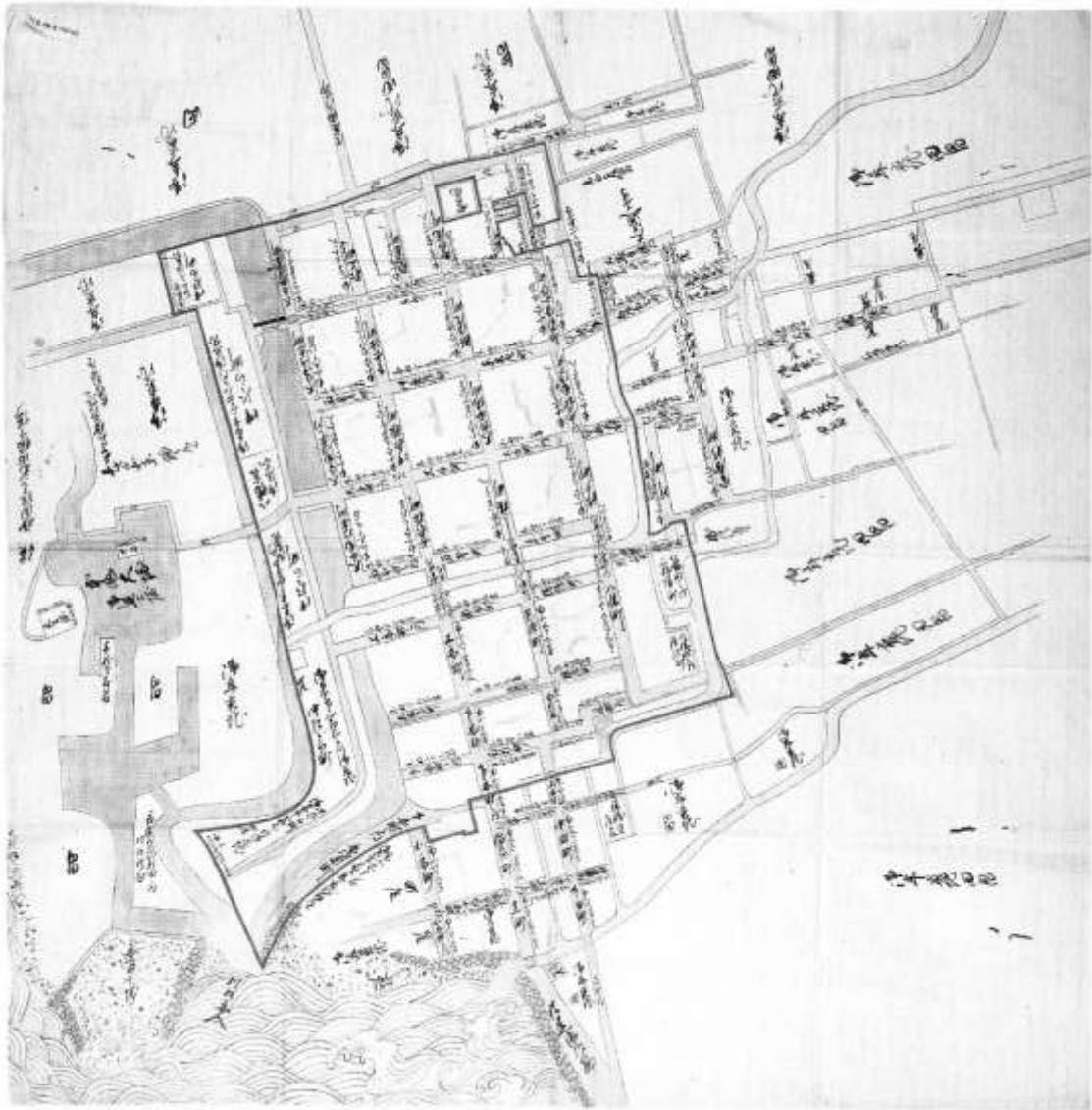
1. 地図から考える城下町の立地

2. 城下町のかたちと構造

- (1) 長浜：天正 2 (1574) 羽柴秀吉 (織田期) 築城
- (2) 近江八幡：天正 13 (1585) 羽柴秀次 (豊臣期) 築城
- (3) 大津：天正 14 (1586) 浅野長吉 (豊臣期) 築城
- (4) 彦根：慶長 9 (1604) 井伊直政 (近世初期) 築城

3. 水口岡山城下町と近世水口城

4. 近江における織豊期と近世初期の城下町

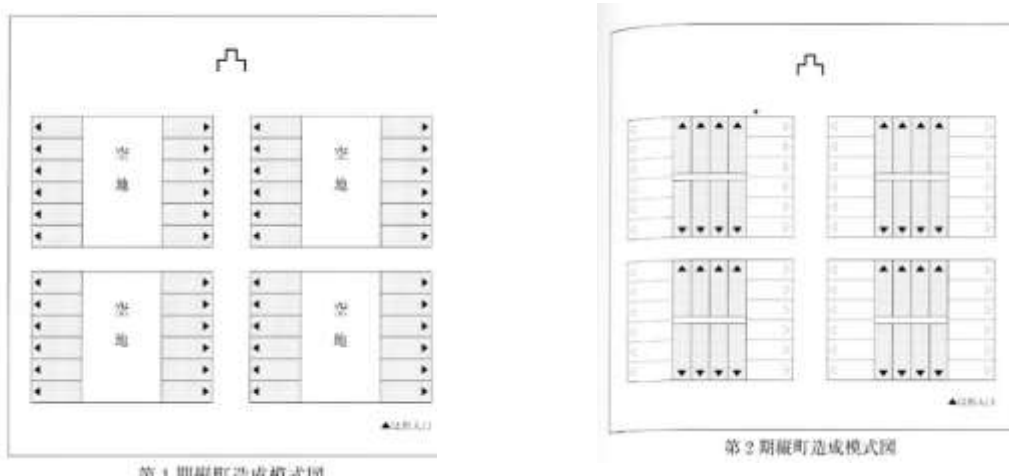


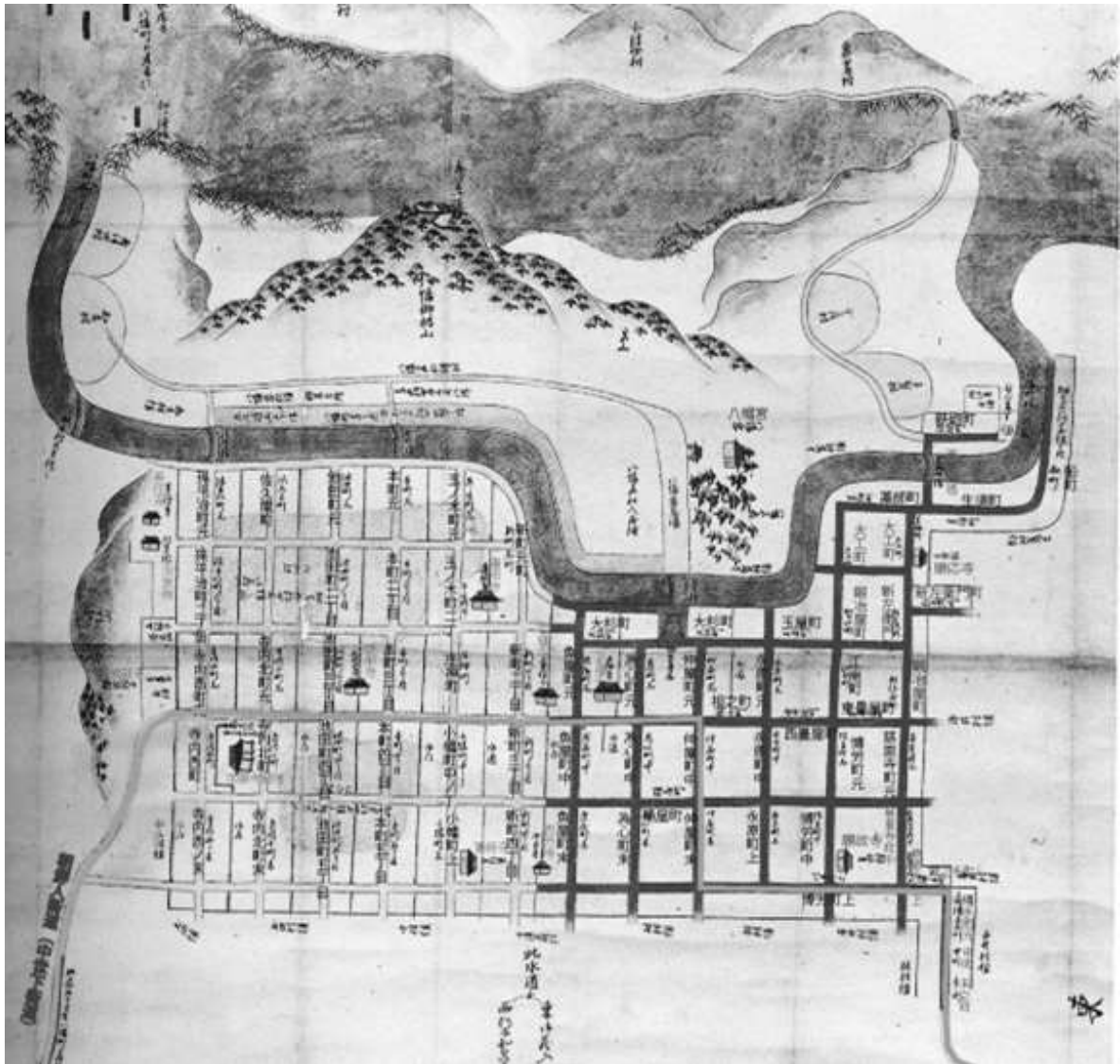
① 「長浜町絵図」元禄9（1696）（市立長浜城歴史博物館編『秀吉の城と城下町—近世城下町のルーツ・長浜—』2002）

② 長浜城下町成立構成図（市立長浜城歴史博物館編『秀吉の城と城下町—近世城下町のルーツ・長浜—』2002）



③ 長浜城下町における「タテ町」と「ヨコ町」の模式図（市立長浜城歴史博物館編『秀吉の城と城下町—近世城下町のルーツ・長浜—』2002）

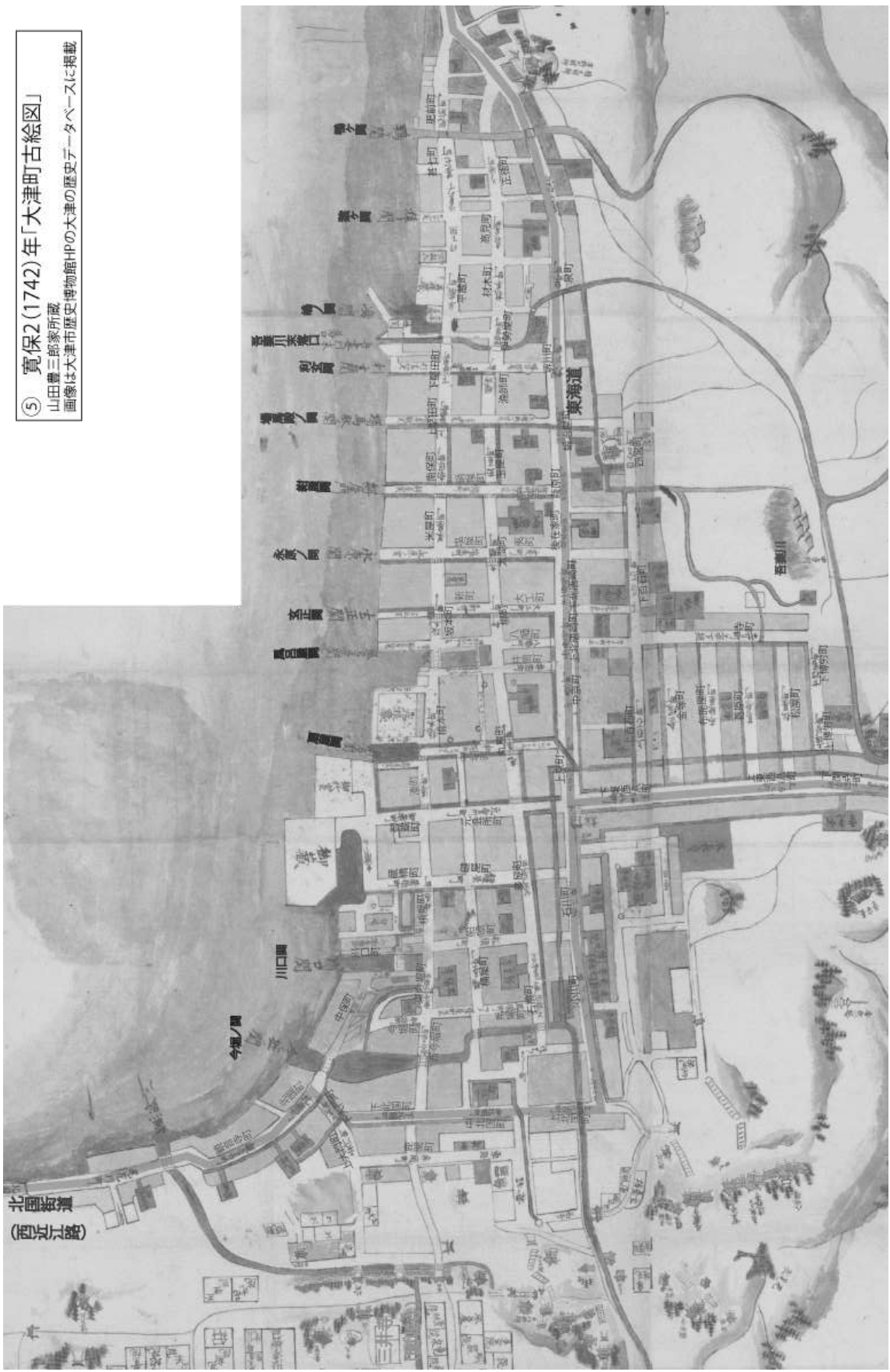




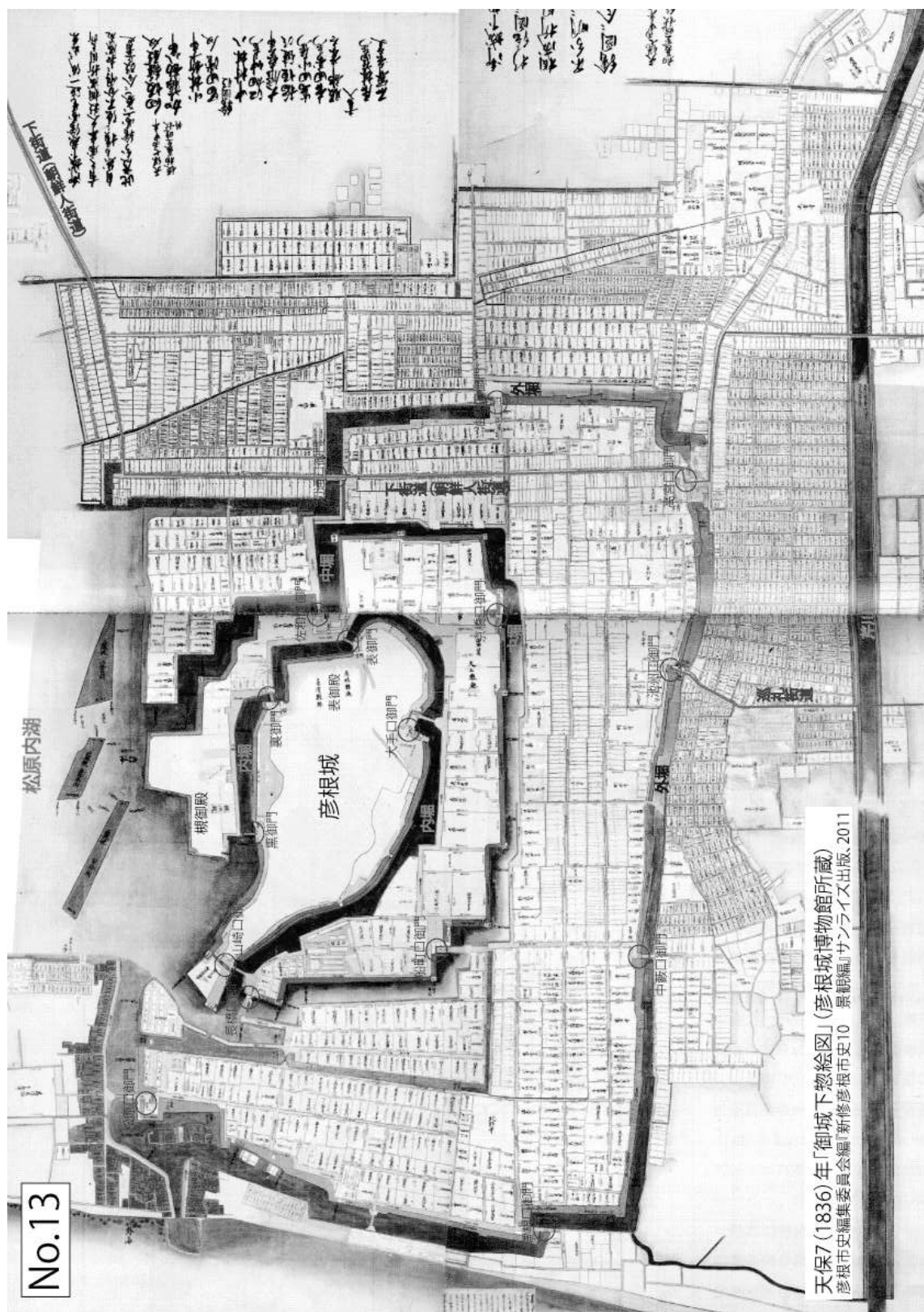
④ 「近州蒲生郡八幡町惣絵図」元禄11（1698）
（近江八幡市史編集委員会編『近江八幡の歴史1 街道と町なみ』近江八幡市、2004）

⑤ 「大津町古絵図」寛保2（1742）（大津市歴史博物館 大津の歴史 DB）

⑤ 寛保2(1742)年「大津町古絵図」
 山田豊三郎家所蔵
 画像は大津市歴史博物館HPの大津の歴史データベースに掲載

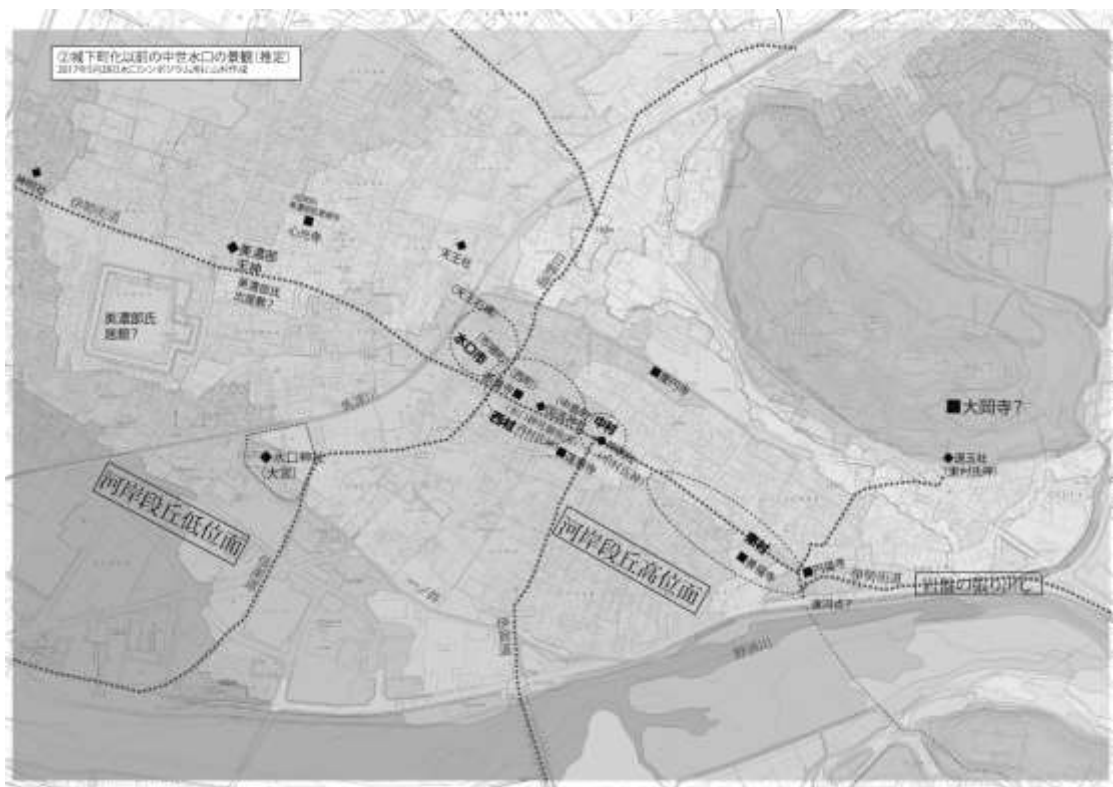


- ⑥ 「御城下絵惣絵図」天保7（1836）（彦根市史編集委員会編『新修彦根市史10 景観編』サンライズ出版 2011）

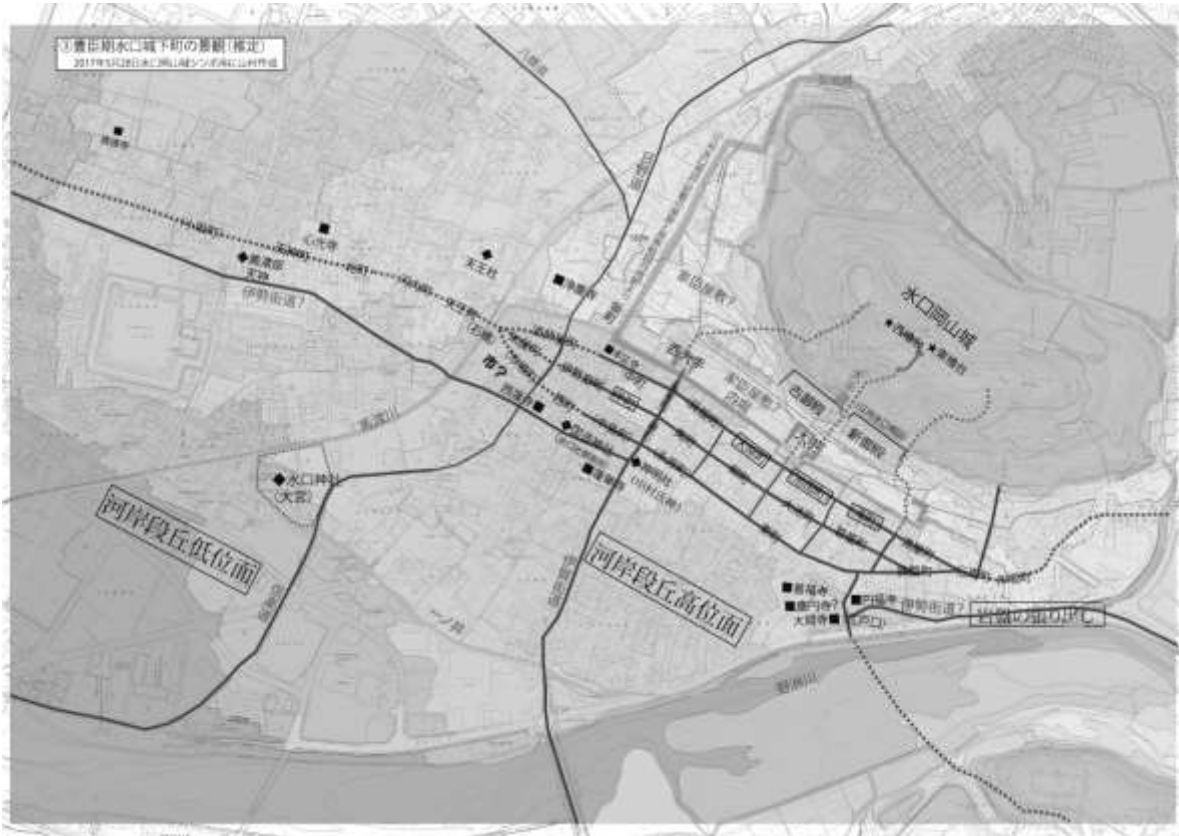




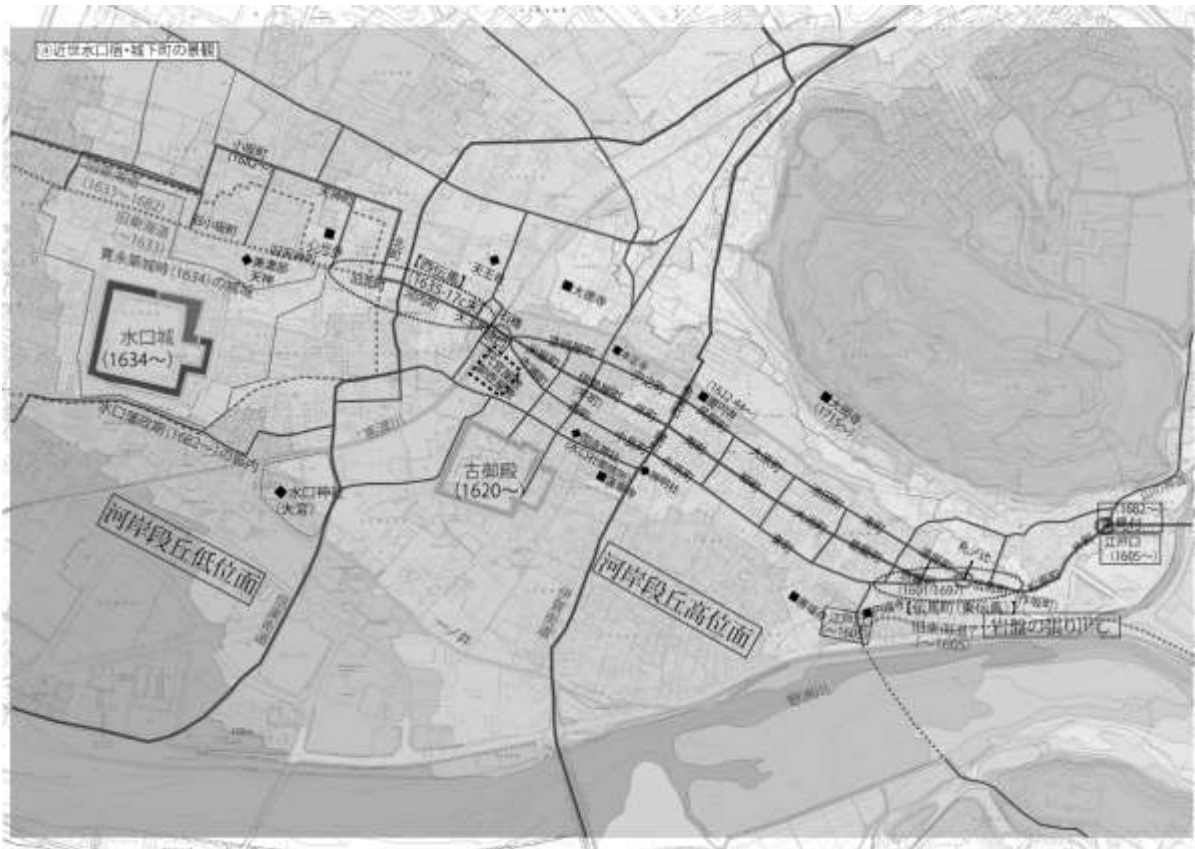
⑦ 大正期地形図にみる水口周辺



⑧ 城下町化以前の中世水口の景観 (推定)



⑨ 豊臣期水口城下町の景観（推定）



⑩ 近世水口宿と水口城下町の景観

令和元年度水口岡山城歴史フォーラム

「水口・伊賀上野・亀山の城と城下町」

資料集

令和元年12月8日発行

編集発行

甲賀市教育委員会

滋賀県甲賀市水口町水口6053番地